

Judith 像の受容と変容

—古英語訳 *Judith* を中心に—

島崎 里子

The Changing Image of Judith in Old English Literature

Satoko Shimazaki

The Book of Judith in the Apocrypha has attracted many talents in the fields of Western art and literature. It reached England in the Old English period, and there are at least three extant translations by Englishmen: *De Virginitate* written in Latin by Aldhelm in the seventh century, the anonymous poem *Judith* in the early tenth century and Ælfric's Homily on Judith in the late tenth century.

In the Bible, Judith is described as a widow who allures the heathen general Holofernes with her beauty in order to save her country from his army. Her alluring behavior evidently troubled the English translators who were mostly monks and priests. They often omitted or changed original descriptions which were not in keeping with their moral principles. This paper deals with such transformations in their translations. Descriptions of Judith's ornaments in her changing clothes are focused upon in particular. Ælfric's deletion of lilies which are described among Judith's ornaments is also discussed.

1 はじめに

旧約聖書の経外典 (Apocrypha) の一つ『ユデト書』(The Book of Judith) は、西洋絵画や文学の分野で古くから数多くの画家や作家たちの想像力を刺激してきた。神を畏れる美しい未亡人 Judith が、戦火の祖国を救うべく、美貌を武器に侍女と二人で敵陣へ侵入し、異教徒の敵将の首を剣で自ら討ち取り、祖国を勝利へ導くというストーリーは、ギリシャ語訳からラテン語訳を経て、あるいはギリシャ語訳が直接もたらされて古英語期のブリテン島へも伝播する。

7世紀には、イングランド中部の Malmesbury Abbey の僧院長であった Aldhelm (c.640-709) が、ラテン語の大著 *De Virginitate* の中で Judith を取り上げている。*De Virginitate* は、ロンドン近くの Barking Abbey の尼僧院長 Hildelith とそこに集う尼僧たちの求めに応じて、

Aldhelmが純潔 (virginity) の重要さについて説いた著作である¹。『ユデト書』を含む、テーマにふさわしい男女約60名にまつわる物語が、古典を引用しながら列挙され、特に彼らの純潔の美德を強調する筆致で描かれている。この中でAldhelmは、*virgin*を*virginitas* (*virginity*)、*castitas* (*chastity*)、*iugalitas* (*conjugalit*y or marriage)の3つのランクに分類し、序列をつけている。最上位は*virginitas*であるが、結婚が純潔を妨げるものではなく、結婚をしていても*virgin*に位置づけられる。すなわち、純潔であるか否かは、単に肉体の状態によって決められるのではなく、精神的なレベルによって決められるものであることを説いている。また、*castitas*は、結婚の経験があっても、その後、禁欲 (*celibate*) を誓い、宗教的な生活を選んで再婚を避けて暮らしている人々——*Barking Abbey*に集う尼僧にも、このような女性たちがいた——を指し、*virginitas*に次ぐ地位を与えられている²。聴衆に対するAldhelmの配慮を伺うことができる。

旧約聖書のJudithもまた、信仰に篤い未亡人で、夫の死後、粗布と喪服を常に身につけ、侍女と共に慎ましく暮らしていることから、彼女の物語は、*De Virginitate*執筆の際のAldhelmの意識に自然に上ったと思われる。しかしその一方で、旧約聖書のJudithには、自らの美貌と美しい華やかな衣装で身を飾って敵将を惑わし、その結果、陥落の危機に瀕した祖国を勝利に導いたという事実がある。尼僧に対する虚飾への戒めを念頭に執筆を進めるAldhelmが、聖書の記述の解釈に当惑を感じつつ、随所で原典の本文をパラフレーズする必要に迫られたであろうことは想像に難くない。

例えば、『ユデト書』には、一計を案じ、敵陣へ向かう前に華やかに着飾るJudithの姿が描かれる部分がある。Aldhelmは、祖国を救う道は、もはやそうする以外には残されておらず、ここでのJudithの行為は全て、一族への深い思いやりの気持ちから発したもので、決して純潔の美德から逸脱するものではないということを、本文中にわざわざ書き加えている。また、Judithを描写する前後で更に次のような断り書きをしている。

“De qua in •LXX• translatoribus scriptum est”

“En, non nostris assertionibus sed scripturae astipulationibus...” (*De Virginitate*)

“Of her, it is written in the Septuagint”

“You see, it is not by my assertion but by the statement of Scripture...” (*Aldhelm*)

聖書の記述に忠実であろうとしながらも、自らの道徳観との矛盾や聴衆である尼僧への影響を考慮して、何とか論旨に一貫性を持たせようとしたAldhelmの心情が透けて見える。

10世紀になると、古英語による*Judith*が作られ、2点が現存する。一つは10世紀初めの作とされる韻文*Judith* (作者は不詳につき、以後、*Judith-poet*と呼ぶ)、もう一つは、10世紀の終わり頃、イングランド中部のEynshamにあったMonasteryの修道院長Ælfric (c.950-c.1010) によって書かれた説教散文*Judith* (以後、散文*Judith*と呼ぶ) である。どち

らの *Judith* も、原典を単に英語に翻訳するにとどまらず、部分的に強調が施されたり、削除されたり、全く新たな要素が付け加えられたりしながら、原典とは異なる時代的・文化的背景を持つイングランドの聴衆に受け入れられ易いように、場面によってはかなり大胆なパラフレーズが行われている⁵。

韻文 *Judith* は、本文の大半が失われており、解釈に不明な箇所も多い。現存する349行は、『ユデト書』第12章、第10節から、第16章、第1節の内容、すなわち、*Judith* が窮地に陥った祖国 *Bethulia* を救うべく、侍女一人を伴って敵陣へ侵入し、敵将 *Holofernes* の寝首を掻いて、強大な *Assyria* 軍を打ち破ったという下りを扱っている。旧約聖書に比べて登場人物の数を極端に減少させ、*Judith* と *Holofernes* の姿が、美德と悪徳のコントラストを成してハイライトされるような工夫が施されている。また、*Judith-poet* は、旧約聖書に描かれた *Judith* 像を、当時の *Anglo-Saxon* の伝統的な英雄詩に登場する英雄像になぞらえて、大胆に書き改めている。例えば、古英詩 *Beowulf* の中で、主人公の英雄 *Beowulf* を形容するために頻繁に用いられた *æðele* (*noble*)、*ellenrof* (*courageous*)、*modig* (*courageous*)、*snoter* (*wise*) などの形容詞を *Judith* に対して多用し、*Judith* に女性としての特性を殆ど感じさせない。同時に、*Holofernes* を自らの美貌と美しい衣装で魅了し、陥れるという部分を本文から完全に削除している。更に、韻文 *Judith* では、*Judith* は初めから酒宴の場には同席せず、一方 *Holofernes* も、仲間内の宴会ですっかり泥酔し、*Judith* の待つ寝所へ到着するなり失神してしまい、その直後に斬首されるという筋書きに構成し直されている。*Magennis* (1995) も指摘するように、*Holofernes* の最期は、酒に溺れ、美女に魅了されるという彼の人間的な弱さが原因となって引き起こされたもので、*Judith* の不誠実さや狡猾な策略によるものではないということが強調されている⁶。ここでの *Judith* は、信仰に篤い一人の美しい未亡人というより、信仰の上に知恵と勇気と大胆さを併せ持った英雄的な人物として描かれている。

Ælfric の散文 *Judith* は、本文中2箇所にて尼僧に対する呼びかけが含まれている (“*Sume nunnan*” 1. 429, “*min sustor*” 1. 443)⁷ ことから、尼僧への戒めを念頭に書かれた説教文と推測されている。原典に比べて、神に対する *Judith* の絶対的な信仰と貞節が特に強調され、異教徒 *Holofernes* の悪徳とのコントラストが際立つように、頻繁にパラフレーズが行われている。*Godden* (1991) によれば、光と闇、純真と邪悪といった対立する概念が、*Judith* と *Holofernes* という二人の人物として具現化されると同時に、この二人の人物自身そのまま、守りの堅い城壁都市 *Bethulia* とその都市を包囲しつつも陥落させることのできない *Assyria* の侵略者に対するメタファーとして機能している⁸。また、*Clayton* (1994) は、散文 *Judith* の成立について、*Ælfric* が *Sigeward* に宛てて書いた手紙の一部を引用しながら、彼が『ユデト書』の翻訳を行った目的を明らかにしている。

The widow Judith, who overcame the Assyrian general Holofernes, has her own book among these books about her own victory; it is also set down in English in our

manner, as an example to you people that you should defend your land against the invading army with weapons⁹.

自らの国を、外部から侵入してくる軍勢から、武器を持って守らなければならないという Ælfric の主張は、バイキングの侵略の猛威にさらされていた10世紀当時のイングランドの世情を切実に反映している。Judith は、時にキリスト教のプロパガンダとして、時に愛国心の象徴として、政治的な役割も果たしていたと考えられる¹⁰。

以上のような背景を踏まえ、本稿では、旧約聖書の『ユデト書』に描かれた Judith 像が、イングランドへ伝播した後、Anglo-Saxon の文化の中でどのように解釈され、受容されていたのかについて Aldhelm、*Judith-poet*、Ælfric の3人の翻訳を手がかりに検証する。特に Judith が敵陣へ侵入するに当たり、身支度を整える場面に注目して三者の比較を行う。その際、彼らが参照したと思われるギリシャ語訳、ラテン語（ウルガタ）訳とも比較し、Judith の描写をめぐる訳者の表現の特徴について言及したい。

2 Judith 像の比較分析

祖国 Bethulia を異教徒の侵略から救うため、自らの美貌と美しい衣装で敵を籠絡する策に出る決心をした Judith は、夫の Manasee の死後ずっと身につけていた喪服を脱ぎ捨て、水浴で身を清めると、全身に装身具をつけて装いを凝らし、侍女一人だけを伴って Assyria 軍の陣営へと向かう。これは、旧約聖書の経外典『ユデト書』第10章、第3節から第4節にかけて描かれる Judith の身支度の場面である。この場面を、時代的・文化的に異なる背景を持つイングランドではどのように受容していったのであろうか。

7世紀に、Aldhelm は *De Virginitate* の中で Judith を取り上げている。問題の箇所は、Aldhelm の次のような言葉で始まる。

“De qua in •LXX• translatoribus scriptum est¹¹” (De Virginitate)

“Of her, it is written in the Septuagint¹²” (Aldhelm)

祖国を救うためという大義名分があるにせよ、身を飾って男性を誘惑するという Judith の行為は、聴衆として尼僧を想定しているだけに、なおさら Aldhelm を悩ませたであろう。これから後に書かれることは、自分ではなく、あくまでも聖書が語っているのだということ聴衆に断った上で、本文を引用する体裁を取っている。逆に、聖書には書かれていない、虚飾に対する次のような非難の言葉を、自身の見解ではなく聖書の言葉であるとしながら、先の引用の最後に付け加えている。

“ornatus feminarum rapina virorum vocatur! ¹³” (De Virginitate)

“the adornment of women is called the depredation of men! ¹⁴” (Aldhelm)

以下は、Aldhelm の Judith が、Assyria の敵陣へ向かう前に身支度を整える様子である。

*Induit se vestem iocunditatis suae et imposuit periscelides et dextralia et anulos et omnia ornamenta sua et composuit se nimis in rapinam virorum.*¹⁵

(De Virginitate. 斜体字は本文のまま、下線は筆者による。)

And she clothed herself with the garments of her gladness, and put her anklets, bracelets and rings, and adorned herself with all her ornaments and tricked herself out to prey on men¹⁶. (Aldhelm. Translation mine.)

敵陣へ向かうにあたって、Judith はまず、晴れ着を身につけ、足輪、腕輪、指輪、その他の装身具の順で身を飾り、男性の目を惑わすべく装いを凝らす。先の引用に見た通り、Aldhelm はこの身支度の部分を語る際に、ギリシャ語訳聖書 (Septuagint) を参照したと De Virginitate の中に自ら記している。次に引用するのは、その当該箇所である。

10 3 καὶ ἐν ταῖς ἑορταῖς αὐτῆς, καὶ περιείλατο τὸν σάκκον ὃν ἐνεδεδύκει, καὶ ἐξεδύσατο τὰ ἱμάτια τῆς χηρείσεως αὐτῆς, καὶ περικλύσατο τὸ σῶμα ὕδατι, καὶ ἐχρίσατο μύρω παχεῖ, καὶ διέταξε τὰς τρίχας τῆς κεφαλῆς αὐτῆς, καὶ ἐπέθετο μίτραν ἐπ' αὐτῆς, καὶ ἐνεδύσατο τὰ ἱμάτια τῆς εὐφροσύνης αὐτῆς, ἐν οἷς ἐστολιζέτο ἐν ταῖς ἡμέραις τῆς ζωῆς τοῦ ἀνδρὸς αὐτῆς Ma-
4 νασσῆ· καὶ ἔλαβε σαγδάλια εἰς τοὺς πόδας αὐτῆς, καὶ περιέθετο τοὺς χλιδῶνας, καὶ τὰ ψέλλια, καὶ τοὺς δακτυλίους, καὶ τὰ ἐνώτια, καὶ πάντα τὸν κόσμον αὐτῆς· καὶ ἐκαλλωπίσατο σφόδρα εἰς ἀπάτησιν ὀφθαλμῶν ἀνδρῶν, ὅσοι ἂν ἴδωσιν αὐτήν. ¹⁷

(The Septuagint. 下線は筆者による。)

10-3 and pulled off the sackcloth which she had on, and put off the garments of her widowhood, and washed her body all over with water, and anointed herself with precious ointment, and braided the hair of her head, and put on a tire upon it, and put on her garments of gladness, where with she was clad during the life of Manasses her husband. 10-4 And she took sandals upon her feet, and put about her bracelets, and her chains, and her rings, and her earrings, and all her ornaments, and decked herself bravely, to allure the eyes of all men that should see her¹⁸.

(The Septuagint. 下線は筆者による。)

ギリシャ語訳の Judith は、まず、身につけていた粗布と喪服を脱ぎ、沐浴の後、体に高価な香油を塗り、髪を編んでいる。その後、髪飾り、晴れ着、サンダル、腕輪、首飾り、指輪、耳飾り、その他の装身具の順で身につけて行く。Aldhelm の Judith もほぼ同じ順序で装身具を身につけてはいるものの、ギリシャ語訳のように、脱衣、沐浴、香油、髪を編むなど、女性の身体を直接的に連想させる要素は全て削除されている。一方 Aldhelm は、ギリシャ語訳には描かれていない足輪を、装身具の中に新たに付け加えている。尼僧への、特に華美な装飾に対する戒めを念頭に執筆している Aldhelm が、原典にはない装身具を新たに付け加えているのは興味深い。

当時 Aldhelm がギリシャ語訳の他に参照した可能性が考えられる、ラテン語（ウルガタ）訳を次に引用する。

10-2 abstulit a se cilicium et exuit se vestimentis viduitatis suae 10-3 et lavitcorussuum et unxit se myrro optimo et discriminavit crinem capitis sui et inposuit mitram super caput suum et induit se vestimentis iucunditatis suae induitque sandalia pedibus suis adsumpsitque dixtraliola et lilia et inaures et anulos et omnibus ornamentis suis ornavit se 10-4 cui etiam Dominus contulit splendorem quoniam omnis ista compositio non ex libidine sed ex virtute pendeat et ideo Dominus hanc in illam pulchritudinem ampliavit ut incomparabili decore omnium oculis appareret¹⁹
(*Biblia Sacra Vulgata*. 下線は筆者による。)

10-2 And she took off her haircloth, and put away the garments of her widowhood. 10-3 and she washed her body, and anointed herself with the best ointment, and plaited the hair of her head, and put a bonnet upon her head, and clothed herself with the garments of her gladness, and put sandals on her feet, and took her bracelets and lilies, and earlets, and rings, and adorned herself with all her ornaments. 10-4 and the Lord also gave her more beauty; because all this dressing up did not proceed from sensuality, but from virtue: and therefore the Lord increased this her beauty, so that she appeared to all men's eye incomparably lovely²⁰.

(Douay Old Testament. 下線は筆者による。)

ウルガタ訳の Judith も、ギリシャ語訳とほぼ同じ手順で身支度を整える。ただし、ウルガタ訳は、Judith が行った身を飾る行為は、自身の肉欲からではなく、美德に端を発しているということを聴衆に断り、それ故に、全ての男性の目に魅力的に映るように、神が彼女に更なる美を授けたと新たに書き加えている。装身具の種類や、Judith が装身具を身につけることに対して、それを正当化するコメントを付け加えるスタイルは、Aldhelm の場合を思い起こさせる。De Virginitate の中で、Aldhelm はギリシャ語訳を引き合いに出して

議論を展開しているが、Judith の身支度の場面に関して見る限り、ギリシャ語訳よりも、むしろウルガタ訳に負っていると思われる箇所が目につく。

10世紀に、古英語による *Judith* が作られ、二点が現存する。Magennis (1995) は、両者が共に旧約聖書の原典を比較的自由にパラフレーズしているとして、次のように述べている。

Both Old English versions of Judith story, the poem *Judith* and Ælfric's *Homily on Judith*, are free reworkings (though to different degrees) of the Old Testament original. Each has its own distinctive narrative emphases. Ælfric's paraphrase is less of a radical re-creation than the poem, but it is not a straightforward translation...²¹.

特に大胆な改編が指摘されている韻文 *Judith* において、Judith の身支度の場面はどのように描かれているだろうか。下線は筆者による。

Het ða niða geblonen
þa eadigan mægð ofstum fetigan
to his bedreste, beagum gehlæste,
hringum gehrodene²². (*Judith* ll. 34-37.)

Then, steeped in sin,
He ordered that the blessed maid be fetched,
Laden with ornaments and decked with rings,
To grace his bed²³.

ここで Judith が身につけているのは 'beag (>bee)' と 'hring (>ring)' の2点のみである。Bosworth-Toller (1970) によれば、'beag' は金属で出来た環を意味し、指輪、腕輪、首輪、冠などを含む。Treasure と同義で用いられる場合もある。'Hring' も同様で、指輪を含む広義での環を表す²⁴。韻文というスタイルの特性を考慮すれば、*Judith-poet* がこれら2語であらゆる装身具を象徴的に表し、その他の描写を省いてしまった可能性もある。しかし、少なくとも *Judith* の身支度の場面そのものが完全に本文から削除され、男性を惑わす意図への言及も全く見られないという事実は、詩人の意図的なパラフレーズを感じさせる。このことは、*Judith-poet* が、Judith の身支度の場面以降の、例えば「討ち取った Holofernes の首を侍女に手渡す場面を聖書に非常に忠実に描いている²⁵」ことを考え合わせると興味深い。場面によって恣意的に描写の力点を移し、Judith から女性性を感じさせる描写部分を巧みに排除し、神性を帯びた抽象的な人物像を描き出すのに成功している。

また、'beag' と 'hring' は、古英詩 *Beowulf* において、戦での武勲と栄誉を称えるために王から英雄へと授けられる宝物として頻繁に描かれる。この場面においても、'beag' と 'hring'

は、Judithの人物像に、Anglo-Saxonの伝統的な英雄像を投影する小道具として有効に機能していると同時に、その後のJudithの武勇と栄誉をも予想させる。Aldhelmが、しばしば断り書きをしながらも聖書のJudith像から大きく逸脱することが出来なかったのに対し、Judith-poetは、聖書のJudithや、次に引用するÆlfricのJudithとも明らかに趣の異なる全く新しい女性像を作り出している。

最後に、10世紀後半にÆlfricによって書かれた散文Judithの当該箇所を参照する。下線は筆者による。

heo awearp hire hæran and hire wudewan reaf,
and hi sylfe geglængede mid golde and mid purpuran
and mid ænlicum gyrlum²⁶.

She cast off her haircloth, and her widowdress,
and adorned herself with gold and with purple (garment)
and with splendid dress. (translation mine.)

ÆlfricのJudithは、腕輪や耳飾り、指輪などの装身具を全くつけていない。代わりに粗布と喪服を脱ぎ去った後、それ以前のどの版にも描かれていない金と紫 (gold & purple)の衣装を身につける。ここでÆlfricが行った装身具の削除と衣装に関する新たな加筆は何を意味するのであろうか。細々とした装身具への言及が削除されているのは、この文章が、尼僧に対して虚飾を戒める目的で書かれた説教文であるとされる事実を思い起こせば、自然なことに思われる。しかし、その一方でÆlfricがJudithの衣装の具体的な色彩について言及していることは特筆に値する。Judithの外見の美しさや内面の美德は、これまでどの版においても様々な修飾語によって形容されてきたが、色彩を表す語が用いられた例は、このÆlfricの例以外には見られない。

古英語において、‘purple’はしばしば‘cyning’と共に起し、王の衣装を修飾する。The Microfiche Concordance to Old English (1980)によれば²⁷、現存する古英語文献のうち、‘purple’が‘cyning’と共に起する時、‘purple’は常に王の衣装を修飾して用いられ (8例中8例)、そのうち60% (8例中5例)がÆlfricに現れる (ÆCHom I, 31, ÆCHom I, 37, ÆCHom II, 33, ÆLS (Exalt of Cross), ÆCHom 27)。OED²は‘purple’を次のように定義し、K. AlfredのOrosius (c893)から初出例を引用している。

Purple cloth or clothing; in earliest use, a purple robe or garment; spec. as the dress of an emperor or king; =purple (from purpur Obs., purple n. and a. arch. I. n. 1.)²⁸

Ælfricは、Judithの装身具の種類や数を極端に減少させる一方で、一般的に色彩に乏し

いことが指摘される Anglo-Saxon の作品世界にあって、色彩効果を巧みに利用しているとも考えられる。つまり、皇帝や王の衣装を指して用いられる‘purple’を Judith に纏わせ、その後の彼女の栄光を暗示的に示すのに成功している。また、Ælfric が‘purple’をそのような意図で用い、当時、実際にそれが有効に機能していたのであれば、このことは、10世紀 Anglo-Saxon 世界のローマ化の度合いという別の興味深い問題を提起する。

3 Judith 像の受容と変容

前節の分析で示した通り、Judith が敵陣へ向かうにあたって行った身支度の場面には、訳者によって記述に大きな違いが見受けられる。表1は、それらの差異を一覧にして表したものである。

表1 Judith の装身具

	Septuagint	Vulgate	Aldhelm	Judith-poet	Ælfric
sack/hair-cloth	○	○	×	×	○
garments of widowhood	○	○	×	×	○
wash body	○	○	×	×	×
ointment	○	○	×	×	×
braid hair	○	○	×	×	×
Tire/bonnet	○	○	×	×	×
garments of gladness	○	○	○	×	○
sandals	○	○	×	×	×
bracelets	○	○	○	○	×
chains	○	×	×	×	×
anklets	×	×	○	×	×
lilies	×	○	×	×	×
rings	○	○	○	○	×
earrings	○	○	×	×	×
all ornaments	○	○	○	×	×
allure men	○	○	○	×	×

聖書における Judith の描写には、イングランドへ伝播し、時代が下るに従って抽象化される傾向が見られる。すなわち、Judith が身につける装身具への言及が減少し、一方で、神への信仰の強さや貞節が一層強調して描かれるようになる。また、外見の美によって男性を惑わすという Judith の行為に対する言及も、祖国を救うために不可避だったことを弁解するように加筆する葛藤の時期を経て、その後失われていく。脱衣、沐浴を経て、文字

通り、頭の前から足の先まで着飾る Judith の様子を聖書が詳細に描写するのに対し、Aldhelm 以降、イングランドの訳者たちは、脱衣、沐浴、香油を塗る、髪を編むなど、女性の身体を直接連想させる部分や、女性性を象徴するような装身具を削除する。そして、Judith-poet は Anglo-Saxon の伝統的な英雄に対して用いられる形容詞を Judith に対して頻繁に使用し、Ælfric は、王や皇帝が身につける衣装を彼女に纏わせる。これら一連の書き換えは、単に華やかな装飾を尼僧に対して戒めるという Aldhelm や Ælfric の執筆の目的を直接的に表しているだけでなく、修道士であった Aldhelm や Ælfric の女性観を反映していると考えすることはできないだろうか。つまり、彼らが聖書の Judith 像から削除したのは、単なる華やかな装身具ではなく、女性性（＝性的に男性を誘惑する性質）であり、新たに加筆したのは、男性性（＝武勇の誉れを尊ぶ英雄の性質）だったのではないだろうか。

4 Ælfric と百合

表1によれば、ウルガタ訳は百合を装身具として描いているという点で、他とは明らかに一線を画している。永嶋 (1988) が言うように、「OE 時代の聖職者が用いた聖書はいうまでもなくラテン語訳「ヴルガータ」の手写本である²⁹」ことを考慮すれば、Judith-poet や Ælfric が、ギリシャ語訳よりはウルガタ訳を参照していた可能性は高い。にもかかわらず、両者は共に百合を描いていない。

百合はキリスト教において、処女や純潔、貞節を意味し、聖書や聖人伝の中でしばしば象徴的に用いられる。虚飾を禁じられたクリスチャンとして、イングランドの訳者たちが Judith の描写から装身具を削除したのは自然に理解できる。しかし、純潔や貞節の美德を象徴する百合までも削除する必要があったのだろうか。Tamoto (1996) は、Ælfric の百合の削除について、単なるスペースの問題かも知れないし、他の装身具と同様に、些細なものとして一緒に消去してしまったのかも知れない、あるいは、装身具で身を飾り、敵将 Holofernes を誘惑する Judith が、キリスト教の美德＝百合の象徴にそぐわないために Ælfric が意図的に削除したかも知れないという三つの可能性を示唆している³⁰。本節では Ælfric と百合の関係に焦点を当てて考察を試み、この三つの可能性についても検証してみたい。

Concordance によれば、現存する古英語文献の中に百合 ('lilie' lily) の用例は57例あり、そのうち43例 (75%) は散文に見られる³¹ (その他は、韻文2例、行間注解8例、glossaries 4例)。57例のうち (テキストのない glossaries の5例を除いた) 52例は、用法に関して、大きく二つに分類することができる。一つは生物学的な植物名としての百合を表す用法であり、もう一つは宗教的な文脈で、キリスト教の象徴の一つとしての百合を表す用法である。

植物名としての百合の用例は52例中19例 (36%) で、主に Medical Texts に出現する。古英語における百合は、腫れ ('geswel' swelling) や蛇に咬まれる ('nadran slite' snake bite)、目眩 ('swiman' dazzling)、目の病気 ('eahsealf' eye disease) などの治療のために調合される

葉草の一つとして、処方箋やまじないの中に多く見出される (Lch I (Herb) 109. 3. 1, Med 3 (Grattan-Singer) 24. 1, Lch I (Herb) 109. 2. 1, Med 3 (Grattan-Singer) 122. 1, Med 3 (Grattan-singer) 10. 1など)。他方、宗教的な文脈での用例は33例 (64%) 見られ、聖書の翻訳や聖人伝の中で、処女や純潔、(形容されるのが妻や未亡人であれば) 貞節を象徴してしばしば用いられる。

ところで、Ælfric は説教や聖人伝の中で百合を多用している。先に検証した古英語全体の用例数に照らしても、Ælfric の用例は全体の25% (57例中14例) を占め、他者を圧倒している。ちなみに、11世紀初頭に York の大司教であった Wulfstan (? - 1023) は、同時代人として Ælfric としばしば対照して論じられるが、*Concordance* によれば、彼の残した説教の中に百合は一度も現れない。このように、当時、好んで百合を用いていたと思われる Ælfric が、参照した可能性の高いウルガタ訳には描かれている百合を、散文 *Judith* において敢えて削除したのはなぜなのだろうか。

まず、Ælfric が著作の中で実際に百合をどのように用いていたのかを、全ての用例 (14例のうち、テキストのない gloss の 1例を除いた残りの13例) を検証して明らかにする。なお、下線は全て筆者による。

ÆCHom I, 30 444.9

and, swa swa on lengctenlicere tide, rosena blotsman and lilian hi ymtrymedon³².

and, so as in the spring-tide, blossoms of roses and lilies encircled her³³.

ÆCHom I, 30 444.12

Dæra rosena blostman getacniað mid heora readnysse martyrdom, and ða lilian mid heora hwitnysse getacniað ða scinendan clænnysse ansundes mægðhades³⁴.

The blossoms of roses betoken by their redness martyrdom, and the lilies by their whiteness betoken the shining purity of inviolate maidenhood³⁵.

ÆCHom I, 30 444.33

and forðy heo wæs ymbtrymed mid rosan and lilian, þæt hyre mihta wæron mid mihtum under wriðode...³⁶

and therefore was she encircled with roses and lilies, that her virtues might be supported by virtues...³⁷

ÆCHom II, 10 83.65

ac logon ðry heofonlice hlafas, on lilian beorhtnysse scinende, and on hrosan bræðe stymende, and on swæcce swettran þonne beona huny³⁸.

but there lay three heavenly loaves, shining with the lily's brightness, and exhaling the rose's fragrance, and in taste sweeter than bees' honey³⁹.

ÆCHom II, 36.1 268.13

Behealdað þas lilian hu heo weaxst⁴⁰.

Behold the lilies how they grow. (Translation mine.)

ÆCHom II, 36.1 268.14

næs swa fægere ymscryd. swa swa lilian beoð⁴¹

not as beautifully clothed as lilies are. (Translation mine.)

ÆCHom II, 42 315.153

Godes gelaðung hæfð on sibbe lilian, þæt is, clæne drohtnung; on ðam gewinne, rosan, þæt is, martyrdom⁴².

God's church is in peace has lilies, that is, a pure life-course; in strife, roses, that is, martyrdom⁴³.

ÆLS (Cecilia) 76

Þa cyne-helmas wæron wundorlice scinende on rosan readnysse, and on lilian hwitnysse⁴⁴.

The crowns were shining in a wondrous way, with the rose's redness and the lily's in whiteness⁴⁵.

ÆLS (Cecilia) 100

Ic wundrige þearle hu nu on wintres dæge her lilian blostm opþe rosan bræð. swa wynsumlice and swa werodlice stincað⁴⁶.

I wonder exceedingly how now, on a winter's day, here lily-blossom or rose's breath smells so winsomely and so sweetly⁴⁷.

ÆLS (Cecilia) 110

Ɔa cwæð se broðor, þurh mine bene te com þæs wynsuma bræð to þæt þu wite heonan-forð hwæs blod readat on rosan gelicnysse. and hwæs lichama hwitað on lilian fægernysse⁴⁸.

Then said the brother: ‘though my prayer this winsome breath came to thee, that thou mayest know henceforth whose blood is red in likeness to a rose, and whose body is white with a lily’s fairness⁴⁹.

ÆCHom II, 36.1 270.70

ne nan eorðlic cyning swa wlitige deagunge his hræglum begytan swa swa rose hæfð, an lilie, and fela oðre wyrta te wunderlice scinað⁵⁰

nor any earthly king could get such beautiful dyeing for his garments as the rose has, and the lily, and many other plants which appear wonderful⁵¹

ÆLS (Julian and Basilissa) 32

Ɔa wearð þæt bryd-bed mid bræðe afylled. swylce þær lægon. lilie and rose⁵².

Then was the bride-bed filled with fragrance just as though a lily and a rose were lying there⁵³.

ÆLS (Cecilia) 114

We habbað cyne-helmas halige mid us scinende swa swa rose. and snaw-hwite swa swa lilie. þa þu ne miht geseon þeah þe hi scinende beon⁵⁴.

We (both) have holy crowns with us shining like a rose and snow-white like a lily, which thou mayest not see, though they be shining⁵⁵.

Ælfric が百合を用いた表現に注目すると、非常に特徴的な傾向に気づく。13例中11例 (85%) で百合が薔薇と共に起していることである。両者は二つの異なる性質を象徴し、対照的に配置されている (上記引用の下線部を参照)。例えば、百合の白さに対して薔薇の赤さ (‘hwitnyss’ whiteness vs. ‘readnyss’ redness)、肉体に対して血 (‘lichama hwitað’ white body vs. ‘blod readap’ red blood)、光輝に対して芳香 (‘beorhtnyss’ brightness vs. ‘bræð’ fragrance)、純潔に対して殉教 (‘clænnysse’ chaste vs. ‘martyrdom’ martyrdom) という具合である。ここで注意すべき点は、両者の性質は決して対立するものではなく、相互に補い合い、一体となっ

てキリスト教の理想を体現する役割を担っているということである。このような用法が、当時、コンベンションとして定着していたかどうかは定かではないが、少なくとも *Concordance* で見る限り、Ælfric 以外に百合と薔薇を頻繁に対照して用いる傾向は見られない。

以上の結果から、Tamoto (1996) が示した、Ælfric の百合の削除に関する三つの可能性について考えてみたい。一つ目の、単なるスペースの問題である可能性と、二つ目の、他の装身具と同様に、些細なものとして一緒に消去してしまったのかも知れないという可能性は、非常に低いと思われる。Ælfric は多くの装身具を削除するのと同時に、新たな要素を付け加えてもいる。また、百合は Ælfric が好んで用いた比喻であり、宗教的に極めて象徴的な役割を担う植物である。些細なものとして、他の装身具と同様に削除したとは考えにくい。では、装身具で身を飾り、敵将 Holofernes を誘惑する Judith が、キリスト教の美德＝百合の象徴にそぐわないために Ælfric が意図的に削除したのだろうか。先に、Ælfric がウルガタ訳や Aldhelm を参照していた可能性について述べた。Aldhelm は、未亡人である Judith を、その信仰の強さと清い生活の故に virgin に位置づけ、ウルガタ訳は、敵陣に侵入する Judith に対し、その崇高な意図を理解した神が、更なる美を授けたとしている。そのような先人の記述を知りつつ、Ælfric はここで改めて Judith を百合の象徴には値しないと考えたのであろうか。修道院長であった Ælfric 自身の宗教観と女性観から、潔癖な表現を望んだという可能性は捨てきれない。Judith は、Ælfric が親しんでいたであろう典型的な聖女伝の聖女像からは大きく逸脱している。

当時の典型的な聖女伝では、神を深く信仰する乙女に対し、支配権を持つ異教徒が、多くは結婚によって地上の地位や財産を与えることを約束し、信仰を捨てるようにと迫る。乙女は申し出を拒絶し、異教徒のプライドを傷つけた結果、激しい拷問を受けた末に殉教する。Judith の物語では、神を深く信仰する未亡人に対し、侵略者である異教徒が配される。未亡人は異教徒を陥れ、斬首の後、栄光を手にする。つまり、Judith は聖女の役割を果たしながら殉教しない、極めて特異なキャラクターだということができる。

Ælfric が百合の比喻を用いる際、多くの場合 (85%) は薔薇を共起させる。百合と薔薇は一体となってキリスト教の美德を体現する。しかし、薔薇は殉教の象徴であり、Judith には当てはまらない。日頃、百合を好んで用いた Ælfric が、Judith の装身具の一つとして百合を思い浮かべたものの、薔薇への連想から、採用にためらいを感じて削除したとは考えられないだろうか。つまり、Ælfric が百合を削除したのは、Judith がキリスト教の美德にそぐわなかったからというよりは、当時の典型的な聖女像から逸脱していたからだったのではないだろうか。

注:

- 1 *De Virginitate* は、前半が散文、後半が韻文で構成されている。本稿では、前半の散文部分のみを考察の対象とし、後半については機会を改めて扱いたい。以後 *De Virginitate* からの引用は、*Aldhelmi Opera in Monumenta Germaniae Historica*. Ed. Ehwald, R. Berlin: Apud

- Weidmannos, 1919. rpt. München: 1984. による。
- 2 *Aldhelm: The Prose Works*. Trans. Lapidge, M. and Herren, M. Rowman & Littlefield: D. S. Brewer, 1978. 55. 以後、*De Virginitate* の現代英語訳はこの版による。
 - 3 *Virginitate*. 317.
 - 4 *Aldhelm*. 127.
 - 5 Magennis, H. “Contrasting Narrative Emphases in the Old English Poem *Judith* and Ælfric’s Paraphrase of the Book of Judith.” *Neophilologische Mitteilungen* XCVI (1995): 61.
 - 6 *Ibid.* 62.
 - 7 Assmann, B. “Abt Ælfric’s Angelsächsische Homilie Über das Buch Judith.” *Anglia* 10 (1887): 104. 以後、Ælfric の散文 *Judith* の引用は全てこの版による。
 - 8 Godden, M. “Biblical Literature: the Old Testament.” *The Cambridge Companion to Old English Literature*. Ed. Godden, M. and Lapidge, M. Cambridge: CUP, 1991. 222.
 - 9 Trans. by Clayton, M. in *The Old English Version of the Heptateuch*. Ed. Crawford, S. J. EETS OS 160. London: OUP, 1922. 48. quoted in Clayton, M. “Ælfric’s *Judith*: manipulative or manipulated?” *Anglo-Saxon England* 23. Eds. Lapidge, M. et al. Cambridge: CUP, 1994: 215.
 - 10 Pringle, I. “‘Judith’: The Homily and the Poem.” *Traditio* 31 (1975): 83-97.
 - 11 *Virginitate*. 317.
 - 12 *Aldhelm*. 127.
 - 13 *Virginitate*. 317.
 - 14 *Aldhelm*. 127. Lapidge & Herren (1978) は、女性の虚飾に対する非難の言葉には出典があるとしながら、*Vetus Latina version (Biblorum Sacrorum Latinae Versiones Antiquae, ed. P. Sabatier [Rheims, 1743], vol. I)* に言及している。
 - 15 *Virginitate*. 317.
 - 16 *Aldhelm*. 127. Ehwald の *Aldhelmi Opera* (1919. rpt. 1984.) のテキストと、それに対応する Lapidge & Herren (1978) の現代英語訳には、必ずしも一致していない場合が見受けられる。この箇所においても、Ehwald のテキストにはない ‘lilies’ や ‘earlets’ といった語が、Lapidge & Herren の現代英語訳には、特に断りなく挿入されている。翻訳に関して、Lapidge & Herren (1978) は、*Virginitate* の聖書引用部分に対する現代英語訳は Douay-Rheims (1582-1609) に拠ったと記している (p. 21.)。従ってここでは、テキストに即した筆者の現代英語訳を採用した。
- 一方 Ehwald は、本文欄外の脚注に、*versio antiqua Sabatier I* から *Book of Judith* の当該箇所を、特別なただし書きをつけずに引用している。この版は、Douay には描かれていない足輪 (*periscelides*) が含まれているという点で興味深い。Ehwald のテキストにも足輪が含まれている。以下にその引用を示す。
- Induit se vestem iocunditatis suaem, qua vestiebatur in diebus viri sui Manasse, et accepit soleas in pedes suos et inposuit periscelides et dextralia et liliolum et annulos et inares et omnia ornamenta sua et composuit se nimis in rapinam virorum
- (*Virginitate*. 317. 欄外の脚注から。)
- 17 *The Septuagint with Apocrypha: Greek and English*. Ed. Brenton, C. L. London: Samuel & Sons, 1851. rpt. Peabody: Hendrickson, 1986. 47.
 - 18 *Ibid.*
 - 19 *Biblia sacra: juxta Vulgatam versionem*. Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft. 1994. 207.
 - 20 Trans. from Douay Old Testament in *The Parallel Apocrypha*. Gen. Ed. Kohlenberger III, J. R. NY

- & Oxford: OUP, 1997. 126-128.
- 21 Magennis. 61.
- 22 *Judith*. Ed. Griffith, M. Exeter: Univ. of Manchester Press, 1997. 98. 以後、韻文 *Judith* の引用は全てこの版による。
- 23 *A Choice of Anglo-Saxon Verse*. Trans. Hamer, R. London & Boston: faber and faber, 1970. 139.
- 24 Bosworth, J. and Toller, T. N. *An Anglo-Saxon Dictionary*. London: OUP, 1898. rpt. 1929. s.v. beag and hring.
- 25 *Judith*. Ed. Timmer, B. J. London: Methuen, 1952. rpt. Exeter: Univ. of Exeter Press, 1978. 14.
- 26 Assmann. 96.
- 27 *A Microfiche Concordance to Old English*. Comp. Healey, A. P. and Venzky, R. L. Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 1980. 以後、*Concordance* からの引用は全てこの版による。また、以後、本稿に引用する古英語作品の省略記号は、*A Microfiche Concordance to Old English: The List of Texts and Index of Editions*. Comp. Healey, A. P. and Venzky, R. L. Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 1980. rpt. with rev. 1985. による。
- 28 Murray, J. A. H. et al. *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. Simpson, J. A. and Weiner, E. S. C. Oxford: OUP, 1989. s.v. purple.
- 29 永嶋大典著、『英訳聖書の歴史』、東京：研究社、1988年、31頁。
- 30 Tamoto, K. “*Lilia* Not Mentioned in Ælfric’s Homily on Judith.” 『愛知大学文学論叢』、開学50周年記念特輯号、愛知大学文学会、1996年、192-193頁。
- 31 *Concordance*. s.v. lillie.
- 32 *The Homilies of the Anglo-Saxon Church*. Vol. I. Ed. and Trans. Thorpe, B. London: Printed for Ælfric Society, 1844, rpt. NY & London: Johnson Reprint, 1971. 444.
- 33 Ibid. 445.
- 34 Ibid. 444.
- 35 Ibid. 445.
- 36 Ibid. 444.
- 37 Ibid. 445.
- 38 *The Homilies of the Anglo-Saxon Church*. Vol. II. Ed. and Trans. Thorpe, B. London: Printed for Ælfric Society, 1844, rpt. NY & London: Johnson Reprint, 1971. 136.
- 39 Ibid. 137.
- 40 *Ælfric’s Catholic Homilies*. The 2nd Series. Text. Ed. Godden, Malcolm. EETS. SS 5. London, NY & Toronto: OUP, 1979. 268.
- 41 Ibid.
- 42 Ibid. 546.
- 43 Ibid. 547.
- 44 *Ælfric’s Lives of Saints*. Vol. II.. Ed. Skeat, Walter W. EETS. OS 114. London: OUP, 1900. rpt. as two vols. 1966. 360.
- 45 Ibid. 361.
- 46 Ibid. 362.
- 47 Ibid. 363.
- 48 Ibid. 362.
- 49 Ibid. 363.
- 50 *Homilies. of the Anglo-Saxon Church*. Vol. II.. 464.

- 51 Ibid. 465.
- 52 *Ælfric's Lives of Saints*. Vol. I. Ed. Skeat, W. W. EETS. 76. London: OUP, 1881. rpt. as two vols. 1966. 92.
- 53 Ibid. 93.
- 54 *Lives of Saints*. Vol. II. 362.
- 55 Ibid. 363.

(しまざき さとこ 英語コミュニケーション学科専任講師)